
蘇生屋

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蘇生屋

【Zコード】

N1667BA

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

「私？」 蘇生屋、とでもいっておこうか。……君が殺したあの人間を、生き返らせるのか。それともこのまま殺すのか。選んで」

人を殺した。 ひとを、ころした。

ナイフを抜かなければ、助かったんだろうか。

奴の傷口からあふれ出る血を見ながら、僕の手の中にある真っ赤なナイフを見ながら、そんなことを思った。

ピクリとも動かない奴の身体を、つま先で蹴ってみる。けれどやつぱり反応がない。恐る恐る、奴の首に手を当てて、脈拍を確認した。 いや、確認できなかつた。

「……死んで、る」

耐えきれなくなつた僕は物陰に移動し、激しく嘔吐した。

どうして。どうして、こんなことになつたんだろう。

「大丈夫？」

背後から急に声をかけられて、僕はどび跳ねんばかりに驚いた。 口元を拭いながら、ゆっくりと振り返る。 そこには、見知らぬ女性が立つていた。二十五、六歳だろうか。長い黒髪が、風のリズムに合わせて揺れている。

彼女はうつすらと笑みを浮かべ、こちらを見ていた。……まるで、幽霊みたいに。

僕は死体の方に目を向けないように注意しながら、頷いた。

「……だ、大丈夫、ですから」

「見てたよ、全部

僕は目を見開く。……見てたって、それは、僕が、

「人を殺したでしよう。ナイフで」

そう言われて、僕はもう一度、畠の中のものを吐きだした。

「よお、森野。またちょっと金貸してくれよ。二万でいいからさあ放課後、捕まらないようわざと帰ろうとしていた僕の前に、小村が立ちはだかった。学年で一番背の低い僕にとつて、小村は巨漢だ。一歩後ろへ下がる僕を見て、小村は笑った。

「いいよなあ?」

小村の家は、お金に困っているわけではない。むしろ困窮しているのは、僕の家の方だ。父は身体が弱く、今は入院している。母は毎日、朝から晩まで休みなく働いて、それでも苦しいくらいなのに。貯金していたお年玉は、すべて小村に吸収された。中学生の小遣いなんて、高が知れている。二万円なんて、用意できない。母の財布からお金抜くなんて、そんなことは……。

「もう無理だよ

「ああ！？」

小村に胸ぐらを掴まれて、一瞬息ができなくなる。「ぐつ」と声を漏らす僕を見て、小村は声をあげて楽しそうに笑った。僕の胸ぐらを力任せに引っ張り、顔を近づけると

「二万だぞ。いつもの場所に持つてこい。夜の九時だ。遅れたら殺すからな」

そう言い放ち、僕の鳩尾みぞおちに蹴りを食らわせた。

小村を殺す。そんなことを考えていたのは確かだ。だからこそ僕は、約束の場所ひとけ人気のない河原ひとかにお金は持つていかず、代わりに果物ナイフを持っていった。

違う。本当はただ、ナイフで脅すつもりだつたんだ。

「これ以上金を要求してくるな」って、そう言えたらよかつた。

「なのに小村君が突っ込んできて、揉み合つてるうちに刺しちゃつたわけだ」

胃液まで吐きつくした僕を見て、見知らぬ女性は腕を組んだ。口元は笑つていて、けれど楽しそうではなかつた。苦しむ子供を見守る保護者のような、目。

僕は女性の姿をもう一度確認する。嫌な言い方になるが、ぱっと

しないグラビアアイドルのような顔だ。丈の長い茶色のロート、黒のブーツ。……身長は、百六十センチほどだろうか。それでも、チビの僕からすれば大きく見える。

「……あなた、なんなんですか」

四つん這いになっていた僕はのろのろと立ち上がりながら、女性を見上げた。

「私？」

彼女は腕を組んだ体勢のままにじらりと考へた後、

「蘇生屋そせいや、とでもこいつておひづか」

「……そ？」

聞きなれない単語に、僕は首をかしげた。彼女は、ここからは見えない小村の死体の方を見ながら、白い息を吐く。それから僕の方に視線を戻し、微笑みかけた。菩薩のようで、けれど背筋が寒くなる、微笑。

ゆつくつと。けれど間違いない、彼女はこう言った。

「彼、……小村君だけ？ 生き返らせてあげよっか」

「え……」

「生き返らせてあげる。あなたが望むのなら、ね」

「……あなた、お医者さんなんですか」

僕の質問がよほど間抜けだったのだろう。彼女は声を押し殺してくすくすと笑つた。

「私が医者？ まさか。彼はもう死んでるわ。普通の医者なら、生き返らせることはできない」

「それじゃ、あなたは……」

「蘇生屋」

先ほど言つていた聞きなれない単語を、彼女はもう一度口に元した。

「私はね、死者を甦らせる^{よみがえ}ことができるの。ただ」

「……ただ？」

「恐らく、あなたが思つてこようとする蘇生^もとは違つ。……甦らせるつて、あなたの中ではどういうイメージ？」

訊かれて、僕は黙り込んだ。いきなりそんな非現実な話を、しかもこんな混乱している時に問われても、答えられるはずがない。

そのことに気付いたのか、それとも僕の想像力のなさにあきれたのか、彼女は続きを話し始めた。

「時間を巻き戻したみたいに小村君がすんなり生き返つて、いつも通りの平和な日常が戻る。そう考えるかもしれない。 けれど、私の力で小村君を生き返らせて、そとはならない。『あなたが小

村君を刺した』という事実は消えないし、『小村君が死んだ』という事実は『小村君は死にかけた』という事実に変わるだけ。つまり、小村君を生き返らせたとしても、あなたの罪が消えるわけじゃない。……そうね。小村君を蘇生させたなら、あなたの罪状は殺人未遂かな？　ああ、あと、銃刀法違反？』

それから、と付け加えるように彼女。

「小村君を生き返らせた場合、当然だけど小村君には『あなたに刺された』記憶が残っている。……報復とか復讐とか、あるかもね」

僕の顔から、さあつと血の気が引いた。小村を生き返せたら、僕が小村に殺されるかもしない。

僕の反応を見ていた彼女はやがて、挑発的な笑みを浮かべた。

「　もうひとつ、あなたには選択肢がある。『小村君をこのまま蘇生させない』こと」

「……それだと、僕は殺人未遂じゃなくて殺人者だ」

だつたら蘇生させたほうが、まだマシじゃ

「いいえ」

僕の言葉をさらりと否定した彼女は、目を細めた。

「私、物事を隠蔽したり改竄したりするのも得意なのよ」

「それって、どういって……」

「あなたが『このまま小村君を殺す』、つまり蘇生しない方を選択した場合は、『あなた以外の全ての人』の記憶を操作してあげる。そうね……。小村君は『殺人』ではなく『病死』だったことにしましょうか。そうすれば誰も被害者にはならないし、加害者にもならない。あなたも、世間から殺人者として見られることはない。……『小村君が殺された』という真実を知っているのは、あなただけになるわ」

言葉を失う僕に、彼女は笑いかける。

「小村君を生き返らせるのか。」そのまま殺すのか？」

菩薩のよつで、般若のよつな、笑顔。

「世間から殺人未遂犯として見られるか。自分でだけ、殺人の罪を背負うか」

彼女はその笑顔を、僕に向けた。それは救いなのか、それとも

「選んで」

眠、
なの
か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1667ba/>

蘇生屋

2012年1月4日11時48分発行